

# 日本における都市計画知識・技術の専門化過程

植田 剛史（うえだ たけふみ）

一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

日本学術振興会特別研究員（DC1）

現在の都市計画とその具現化は、専門的知識・技術に大きく依拠する。確かに地権者やディベロッパーは都市空間のあり方に大きな影響力をもつが、しかし、多様な専門家はその知識・技術を各々の業務領域で応用した結果として都市空間が形作られていく側面を見逃すことはできない。

一方、近年の都市計画法改正では、決定過程への「参加」手続きや、民間からの計画提案制度等が設けられてきた。都市計画への市民「参加」に向けた法制度整備は、決定過程において市民と専門家との接点をこれまで以上に生じさせる可能性をはらむ。

決定過程に携わる専門家と市民との「対等」な関係性はいかにして可能か、従来から議論の重ねられてきたこの課題の達成はここでも求められる。だが日本の都市計画における専門家の実情を鑑みると、ここで専門家—市民の二項図式を無条件に前提とすることはできない。各々の業務領域でのみ都市計画に携わる専門家の多くは、一体自らが何の専門家なのか自覚できず、決定過程で専門家として独自の立場を貫けずにいる。一方では、誰が何の専門家なのか、誰と対抗/協働すればよいのか、市民にとっての見取り図は不透明なものとなる。

こうした事態の背景には、都市計画知識・技術の「断片化」状況がある。では、それはいかに生じてきたのか。本報告では、都市計画に用いられる主要な知識・技術の専門化の試みに着目し、技術士資格の設置、業界団体による業務報酬基準策定、民間資格創設などの経過から、その一端を解明したい。